



苔とのであい

毎年7月頃は梅雨前線が日本近辺に停滞し一年中で一番雨量が多い時期となり、長雨や集中豪雨に見舞われることが少なくない。そのため崖崩れや土石流による被害、更に台風の影響もあって自然災害に悩まされる季節である。この梅雨の季節を彩る植物の一つにアジサイがあり、観賞用として広く栽培されて見る機会が多い。花色の基本は美しい青紫色であるが、土壌の酸度によって変化し、アルカリ性で赤みが、酸性で青みが強くなるなど多彩である。

もともとアジサイは日本で育成された園芸品種で、太平洋側の海岸近くに自生するガクアジサイがその原種とされる。この花は半日日蔭を好み、湿った肥沃な土壌に馴染み、湿度の高い梅雨どきにひとときわ私たちの目を楽しませてくれる花である。このアジサイとは裏腹に様々な場所で、物静かに目立たないで粘り強く成長をする植物として知られているものに苔類がある。

私は以前からその存在を知りながら、今まで全く関心を持たなかった。しかしひょんなことから苔類の世話をし始めてから興味を覚え、年寄りの遊び心をかきたてるような事情に遭遇した。それは5年前の診療所新築工事に伴って、自宅の改装と同時に小さいながらも庭園を造ったことに起因している。今から50年ほど前に元屋敷（吉原町）からこの地に移してあった古い井戸枠を庭の中心部に据えて、それに箆を仕掛けるという庭師さんの趣向に沿って二十本ほどの庭木をも移植し、更に盛り土の部分には杉苔を移植して完成させた。ところがこの杉苔の管理に思わぬ気苦労をする羽目になり、その理由が苔類の管理法についての認識不足にあることに気が付いた。

そこで苔植物に関する資料によって苔類の生物学的生態について調べてみて色々なことを知ることができた。即ち、苔と言えば生物学的にはコケ植物あるいは蘚苔類という用語が使われ、苔の種類には大きく分けて蘚類、苔類、ツノ苔の仲間があり、苔庭に多用される蘚類が私たちに馴染み深い苔といわれている。また苔類を大局的に見ると平地は勿論高山地帯、熱帯雨林から極寒の地、時には淡水の池や湖の中など、海水が存在しない世界中のあらゆる場所に生存し、世界中に約2万種以上、日本にも1700種以上が知られているという。

更に、小植物である苔の観察を楽しむためには先ず(1)しゃがんで目線を上げて見る。次に(2)ルーペでよく観察する。更に(3)そっと手で触れてみるの3方法で苔の正体を見てみると、しっかりした茎と葉はあるが根は備わって

いない。そこで多くの苔は寄り集まって群落をつくりお互いの茎で支えあって倒れないようにしている。また苔の体には水分をためる器官がなく密集することで茎の間に空間を確保し大切な水を長く閉じ込める効果を保っている。また苔の葉には乾燥から身を守るための手段がないので、周りの空気が乾燥すると葉や茎が乾き萎れるが、休んでいるだけで枯れるのではない。そのため霧吹きなどで水分を与えると体表全面から水を取り込み、萎れた葉が元に戻る様子は感動的といわれる。あの僅かな朝露だけで石の上の苔が何年も生きていけるのはこの性質のお陰という。

ところでこれからの夏季の水やりは大切であるが、夏の日中は苔の水が熱せられ蒸れる（人間での熱中症の状態になる）ので注意したい。また、夏の季節での水やりは昼間を避けて朝か夕方の方の太陽光の弱い時期に、霧吹きの状態で散布することが大切と言われている。水やりといった単純な作業でも、その時期と方法がその効果を大きく左右することを忘れないようにしたい。

苔は陽光と水で育つともいわれ、環境に対してきわめて順応性の高い植物であって土の無いところでも生育し、陽光と水さえあれば成長する。1~2月の乾燥した状態でも雨が降ると小さい葉を広げ青々とした姿に回復し、中には水分補給をせずとも1年以上生命を維持する種類もあるらしい。梅雨時はしっとり雨に濡れたコケが最も美しく輝いて苔の美しさを現わす季節である。

次に話は変わるが資料に基づき、苔に関連した事柄を記してみたい。

「我が君は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」の歌は平安時代に詠われた和歌であり、「君が代」の原型と言われている歌である。「我が君」と「君が代」の意味は何通りにも受け取れる魅力的な言葉とされる。また、千代に八千代にの言葉は千代とは千年、八千代とは千年以上を意味し、いつまでも末永く永遠にとの意味である。

「君が代」の時代背景をみると明治時代から第二次世界大戦の敗戦までは天皇に奉げる歌として学校で教えられた。戦後は国歌を歌うことが禁止された時期もあったが、現代では天皇国家の歌でなく、国を愛する象徴の歌として、美しい心を表わすものとなり、スポーツ選手が表彰台に上る時には「君が代の曲」が流れる。

